

日本発“マクロライド療法”の新展開 司会のことば

¹ 杏林大学呼吸器内科、² 日本医科大学内科学呼吸器・感染・腫瘍部門

滝澤 始¹、吾妻 安良太²

びまん性汎細気管支炎は、かつてわが国で最も難治性かつ予後不良の慢性下気道疾患として憂慮された疾患であるが、1985年以降、工藤らが発見したエリスロマイシン、クラリスロマイシンやロキシスロマイシンという14員環マクロライド薬による少量長期療法が導入された結果、著しい予後の改善が得られた。マクロライド療法は、日本発の独創性あふれる治療法として、慢性副鼻腔炎、副鼻腔気管支症候群、気管支拡張症などの関連する慢性気道炎症の治療応用へと広がり、さらに欧米では、嚢胞性線維症における有用性が確立され標準的治療に取り入れられている。

それ以来、マクロライドの抗炎症効果とその作用機構に様々な領域から世界的に注目が集まっている。その有効性の機構はいまだ十分に解明されたとは言えないが、とくに好中球性の慢性気道炎症病態における抗炎症作用が重要な役割を果たしていることは広く認識されている。こうした趨勢を受けて、2011年9月、これらの「好中球性炎症性気道疾患」に対してクラリスロマイシンの使用を保険審査上認める通達が出された。さらにマクロライドの細菌機能へのモジュレーション作用、抗ウイルス作用や生体防御機能への効果は、本療法の新たな臨床応用に可能性を開くものとして注目される。

近年は、COPDの急性増悪への予防効果、重症呼吸器感染症における重症化抑制作用、さらにインフルエンザに対する症状軽減効果などが世界中から注目を集めている。

以上のような趨勢の中で、マクロライド療法について基礎的・臨床的研究を精力的に推進してこられた4名の先生方に現状での成果をご発表いただく機会を得たのは、マクロライド療法の今後の発展の為にも、まさに時期を得たものである。肺炎球菌などのマクロライド薬耐性化、また非定型肺炎の重要な病原体である肺炎マイコプラズマの耐性化などの懸念材料も考慮し、本シンポジウムでは今後の本療法のあるべき進展についても討論されると期待される。